

「平和の俳句 8」

2015年08月01日

「東京新聞」の「平和の俳句」は市民の平和への願いがこもって、本当に楽しい。毎朝、真っ先に読む。若い人々の俳句を3句。「白いごはんいつもの日常やさしい家族 藤原さくら 11歳」
「くいとうせいこう この当たり前に見えるものの維持こそが政治の目的であり、我々市民の望みである。簡単で難しい。だからこそ意義がある。それがつまり平和。」
「ご飯を優しい家族と一緒に食べる平和を何としても維持したいと願う。」
「十五歳散りし彼らと鬼百合（おにゆり）と 橋本真梨子 16歳」
「金子兜太 作者は16歳。安城高校生。特攻隊で散華した同世代を、こころから思いやっているのだ。「鬼百合」は花言葉で「賢者」。」
「国のため、家族のために死を受け入れざるを得なかった特攻隊員たち。純真な彼らを、そのように追い詰めていった体制を検証することが残された者の責任である。」
「デモの誘い真面目に読む日が来るなんて 金井柚季奈（ゆきな） 21歳」
「くいとうせいこう これこそがリアルな一句だろう。現実と出会い、若者の生き方が変わった。」
「金子兜太 21歳の作者には、反戦平和のデモなど考えられなかったのに。」
「最近のデモや集会には若者の参加が目立つようになった。自分たちのこととして受け止めるようになったのであろう。これを機に、若者たちが政治に目覚めてほしいと願う。政治が明日の社会を決めて行くのだから。」

「高齢者の俳句から2句。「戦災の後（あと）の平和の有りがたさ 橋本カズイ 101歳」
「くいとうせいこう 101歳は「平和の俳句」史上、最高齢。一句の脇にそっと「両手合わせて拝んでいます」と書かれていた。毎日この欄を読んでくれて感謝です。」
「101歳は大正3年生まれである。戦前、戦中、戦後の激動の時代を生きてこられた方である。戦後70年の平和を喜んでおられることが「両手合わせて拝んでいます」という言葉から真っ直ぐに伝わってくる。」
「真珠湾讃（たた）へし悔（くい）を引きずりて 宮崎洋子 89歳」
「金子兜太 奇襲成功で沸いたが一時的だった。戦争は悪。なんの意味もない。」
「くいとうせいこう 89歳の元「軍国少女」からの一句。悔いを明かすことの勇気を讃えたい。」
「トラ トラ トラ」の暗号電文を受け、国中が沸き立った。この戦争で日本人が310万人、アジアで2,000万人以上の人々の命を失った。戦争ほど悲惨で、罪深いものはない。」

「憲法九条に関する俳句を2句。「なぜあえて卑劣に壊す第九条 長沼通郎（みちお） 41歳」
「金子兜太 国会の九条議論を見ていると、こう痛感するのだ。専守防衛の国を集団的自衛権で戦う国に切り替えようとする駆け引きの「卑劣」さ。」
「政府の答弁は支離滅裂である。米国と一緒に戦争をする国になろうとしているとしか見えない。愚かなことである。」
「九条を吸ってエ吐いてエ生きている 兼子明 55歳」
「金子兜太 九条が日常感のなかで生きている。かるがると呼吸している。」
「くいとうせいこう この表記は面白い。あの抑揚が浮かんできて確かに現在のこの瞬間を味わわせる。」
「憲法九条を守れ」ではなく、呼吸のように「九条を実践せよ」である。」

「生きるには戦車はいらぬ耕耘機 春田成規（しげのり） 78歳」
「金子兜太 ズバリ言い切る小気味よさ。戦争不用、農耕が気持ちよくできればよい。戦車は破壊の手段。耕耘機は生産し建設する手助け。」
「紀元前8世紀、預言者イザヤは「彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする」と言った。剣、槍の武具を高炉で溶かし、鋤、鎌の農機具に変える。食べ物を分かち合い、満腹すれば、戦の必要がなくなる。」

8月は記念すべき「敗戦月」である。戦死者を覚え、平和について思いを巡らしたい。